

コウナゴ不漁前に確認された仔魚採取尾数の減少について

福島県水産海洋研究センター 漁場環境部

部門名 水産業－資源管理－イカナゴ

担当者 森下大悟

I 新技術の解説

1 要旨

コウナゴはイカナゴ稚魚の俗称であり、平成 31 年は福島県海域において、コウナゴが全く漁獲されず資源状況が非常に悪いと推察された。そのため、コウナゴ漁業の CPUE(kg/ヵ統/日、尾数/ヵ統/日)及び福島県の調査指導船(中層トロール網及び丸稚ネット)による仔魚採取尾数の推移を整理した。

その結果、平成 30 年の CPUE は高い数値となっていたが、仔魚採取尾数は、平成 28 年前後から顕著に低下していたことから、資源状況は平成 28 年から悪化していた可能性が考えられた。

(1) コウナゴ漁業の CPUE(kg/ヵ統/日)について、2 そう曳のみを対象とし、標本船日誌及び試験操業日誌を用いて算出した。さらに、コウナゴの市場調査で測定した各年・各月の平均全長及び全長・体重関係式(図 1)を用いて、コウナゴ漁業の CPUE(尾数/ヵ統/日)を算出した。その結果、顕著な CPUE の減少傾向は確認されず、資源状況を反映していないことが推察された(図 2)。

(2) 鵜ノ尾埼沖の中層トロール網及び丸稚ネットの仔魚採取尾数の推移について確認した結果、平成 28 年から採取尾数が減少していることが確認された(図 3)。

(3) CPUE の減少傾向が確認されなかったいくつかの要因として、漁期中のコウナゴサイズに CPUE(kg/ヵ統/日)が影響されるほか(図 4)、魚群探知機により海中のコウナゴ魚群を狙って操業していることが可能性として挙げられた。

2 期待される効果

CPUE 推移からのイカナゴ資源管理が難しいことが明らかになった。一方で、仔魚採取尾数の大きな減少から、漁業者にコウナゴ不漁の予兆を広報することができる。

3 適用範囲

研究者、漁業者

4 普及上の留意点

資源状況を正確に把握するためには、イカナゴ成魚の調査が必要であり、本報告は仔魚採取尾数から資源状況を間接的に推察したものである。

II 具体的データ等

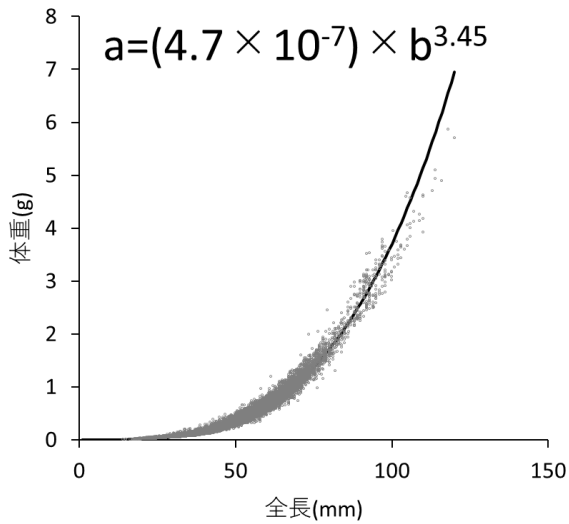


図1 全長と体重の関係図

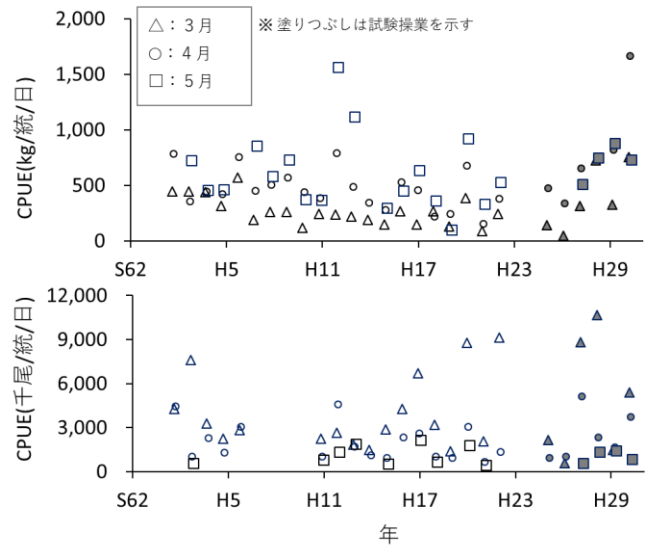


図2 CPUEの推移

上段：CPUE(kg/カ統) 下段：CPUE(千尾/カ統)

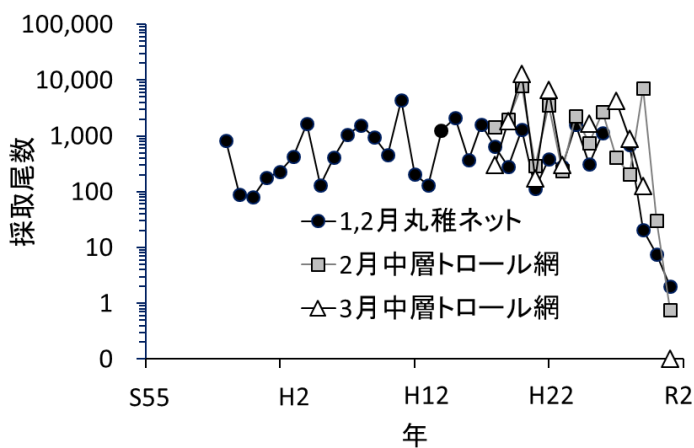


図3 仔魚採取尾数の推移

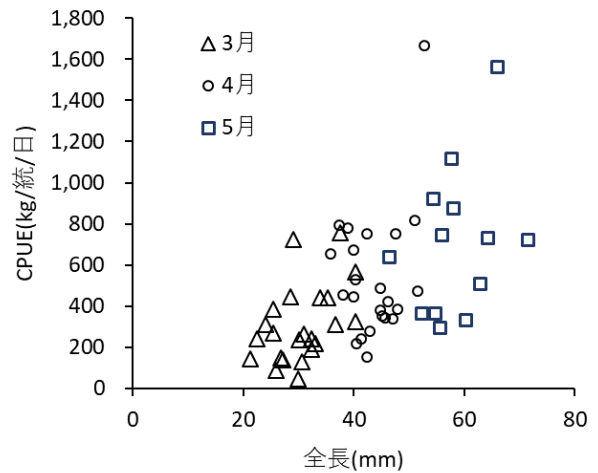


図4 全長とCPUEの関係図 (H2~H31)

III その他

1 執筆者

森下大悟

2 成果を得た課題名

(1) 研究期間 平成28年度 ~ 令和2年度

(2) 研究課題名 海洋基礎生産に関する研究

3 主な参考文献・資料

特になし。